

私、洗濯機をさらいにくわ

作・原田ゆう

登場人物

うえさらいえ  
上更家くすり

舞台は全場を通じて二〇一五年の三月頃。

①

あるアパートの玄関の前。

舞台上に洗濯機が一台置かれている。その洗濯機は古いアパートに時折見られるように外置きにされている。洗濯機は稼働していない。

そこへ、作業着姿の上更家くすりが台車を押して現れる。

台車には何か置かれているがカバーがかけられていて中が見えない。

くすりは台車を置くと、玄関の呼び鈴を鳴らす。応答がないことを何度か確認すると、洗濯機を抱えるように身を寄せる。

くすり (洗濯機に向かって、声を潜めて) 私です、くすりです。ご無沙汰しておりました、お元気でしたか？ 半年前、残暑の厳しい昼日中、あなたひとりをごに残し立ち去っていった私をまだ恨んでおいでですか？ 振り返りもせず、さようならの「さ」の一言もなく、逃げるように消えた私を許すことはできませんか？ でも、聞いてほしいんです、今更だけど聞いてほしいんです。あなたは今もこうして無事にまだ現役で、生活の、日常の、汚れと匂いのついた衣服を、洗ってはすすぎ、すすいでは水をぬき、水をぬいてはすつきりと、繰り返し暮らしのあれやこれやを洗い流していらっしやるのだからうけれど、漸く決心が、あなたを引き取るうという決心がついて、恥ずかしながらやってまいりました。

くすりはぐつと体を洗濯機に寄せつけて、

(急に馴れ馴れしくなって) 今でも覚えているよ。君がやってきた二年前のあの日、君の前任の洗濯機がいに壊れ、一週間経っても次の洗濯機を選びかねていた私にあの人は、「そんな温室育ちで雨風雪に耐えられるもんですか」と大手大量家具販売店から集めてきた洗濯機のパンフレットを迷いなく放り投げると、リサイクルショップへ走り、君を台車に乗せて運んできた。「こいつですよ、こいつはずっと店先の路地で売れ残り、真夏の猛暑も極寒の真冬も耐えしのできたんです。いつか路上の詩だつて聴かせてくれるでしょう」と限なく雑巾で拭き上げ、「幻の血に怯え手を洗い続けるマクベスの妻のように、こいつも落ちない汚れの夢を見てる、見続けているんです」と全身で包み込むように君に抱きついた。あの人と君は本当に仲睦まじく、あの人はご飯茶碗を持ち出してはここで食べたりました。嫉妬のあまり、私は洗剤の代わりにトマトジュースを投入してやって、ふふふ、それもいい思い出ね。あの人の白シャツは薄赤く染まり、君は血尿血便のように赤い液体を流していたっけ。

(♪ 歌う)

聞こえるの

消えないシミの

乾いて笑うあどけなさ

だけど  
私はうれしいの  
いつまでも  
響いてくれよと  
願うほど

(さらに耳を蓋にあてる) 思い出すよ、見えてくるよ聞こえてくるよ、攪拌される洋服、  
旋回する水の音、そして、なによりあなたがいつちばん得意だった脱水のその振動もっ！

くすりは洗濯機の両脇に両手をおき、優しく体重をのせる。

伝わってくる振動に私の性欲がほんのりと芽生えてきます。それは性行為にも似た小さな興奮。「それは浮気ですよ」とあの人は脱水の振動が伝わり、わずかにふるえる私の背中に嫉妬をし、しかし、それで欲情したのか、背後から私をカシッと抱き、「私はどっちに嫉妬してるんでしよう」と耳元で囁くのであります。私は高速回転する洋服を見ながら、こんな幸福の形に目眩がし、私もシアワセになってもいいんだと小さくひとりごち、ふるえと共にそんな想いをあの人に伝えていたのであります……おottoとお、昔話に酔いしれてる場合じゃない、向中野さん、(表札を確認して)、そう、今の君の持ち主、向中野さんが帰ってきてしまうかもしれないからね、ササッと済ませてしまおう、でも、大丈夫、向中野さんは出勤中、朝の八時四〇分に家を出て、帰ってくるのはいつも夜の八時過ぎさ、なんの仕事してるかは知らないけど平日はそう、そうだろう？ 君を引き取る決心をし、私は計画を立てたんだ。まずは向中野さんの生活パターンの観察さ。私は変装をしてこっそりと近くの路地に立ち、向中野データを収集していたんだよ。君も気がつかなかったろう、私の変装は完璧だったからね、吹奏楽部風の女子高生、うだつの上がないサラリーマン、不貞腐れた感じの土方の兄ちゃん、就職を考えてるバンドマン、徘徊する痴呆の老人、ママさんテニスの練習に向かうアラウンドファイフティなご婦人と……まあいいか、そんなことは。さてさて、油断は禁物さ、向中野さんの突然の帰宅ということもあり得るからね。

くすりは腰につけたポーチから工具を取り出して、栓やらホースやらを取り外し始める。

慣れてるでしょ、何度もこの練習をやったんだよ、外置きにされている洗濯機を見つけては取り外し付け直し、三度ほど住民に見つかって逃げ出したりしたけどね、平気だよ、それはわざわざ遠出して宇都宮や厚木の方で試してきたんだから、足はついてないよ。

くすりは洗濯機の蓋を開け、取り外した栓とホースを洗濯槽に入れようとするが、

はっ！

と、くすりは濡れた衣服を洗濯槽から取り出す。

向中野つ、洗濯したのを忘れて放置したまま……うわつ、生乾きの匂いがこの世で一番嫌  
いっ！

くすりは濡れた衣服を洗濯槽に投げ戻す。

へへん、でもね、これも想定内さ。

くすりは台車のカバーを取る。盥と洗濯板が現れ、くすりは洗濯機の側に近づ  
ける。そして、盥を地面に下ろすと、洗濯槽の中の濡れた衣服を放り投げ始め  
る。

それそれっ。

くすりは女性の下着に気がつくど手を止める。

……。

その下着を強く盥に投げつけ、洗濯機に襲いかかる。

ためえっ！ この野郎っ、他の女の下着を洗いやがって！ そのスケベ根性は飼い主と一  
緒だな相変わらず！ そういえば見知らぬ女の下着を洗っていやがったことがあつたな  
あ！ 私の復讐の冷酷さを忘れてはいないだろう？ おい、今回は何色の血を流したい？  
墨汁を流し込んで黒く……なに？ 僕は悪くありません？ 向中野さんには彼女がいるん  
ですからしょうがないじゃありませんか、そんなことくらい想定内でしょう！ サチ済みで  
しょっ……へー生意気になったねえ、まあいいよ、いいですよ、あなたの成長を感じ取れ  
て嬉しいですよっ。

くすりは残りの衣服を盥に入れ替え終わると、先ほど外した栓とホースを洗濯  
槽にしまい、養生テープで蓋やコンセントなどを固定する。

そして、台車を洗濯機の隣にまでくっつけ、洗濯機を台車に乗せようとするが、  
悪戦苦闘する。

(力が入っている) あんたちちょっと太ったんじゃないの？ 幸せ太りかい？ でもね、私  
だつてこの日のためにスポーツジムに週三日で通い、ウエイトレーニングに精を出して  
きたんだ、足も腰も腕つぶしも二割増しだよこんちくしょうっ！ おんどりやつ！

くすりはなんとか洗濯機を台車に乗せる。

ふうー。

くすりは盥を洗濯機のあった場所に置き、一緒に持ってきていた洗濯板を添える。さらに、

洗剤に柔軟剤もつけるのでどうかお許しください。

と、洗剤と柔軟剤を玄関の前に置く。

ふと、玄関のドアを見つめるくすり。

……。

自分でも思いがけずにくすりはドアノブに手をかける。

(ドアに向かって)今でも閉まる時は大きな音を立てているのかい……うだるような暑い夏の日、このドアに寄りかかり寄りそい、あの人とアイスクリームをほおぼっていたっけ、そうそう、そうだね、二人で食べ切れないくらいに買ったアイスクリームを、通りかかったアパートの人や郵便屋さんや宅急便屋さんやチラシ配りの人に、気味悪がられながらもあの方は屈託のない笑顔で配っていたね、それでこの二階に住む女子大生の手にペニラが滴った時、無意識なのか、いや性欲だろうけど、あの野郎、咄嗟にその子の手を取りペロリと舐めやがってさ、私は居合抜きさながらアイスクリームで後頭部をぶっ叩いてやったんだ、とどめに背中にアイスクリームを突っ込んで押し付けてやってもしたさ、女子大生は青ざめた面持ちで舐められた手を見つめていたけれど、スケベなあいつはここに居候するようになってからずっと狙いをつけていたのかもしれないね……居候だって……ふふ、あいつは目白にそれはそれは金持ち学生が住みそうなマンションに部屋を持っていたのに、何を思ったか、この築四十年のアパートに週三、週四で通ってさ、来るたびに服やら本やらを置いていくもんだから、すぐに私の狭い部屋はあいつのものでいっぱいになってね、それが週五、週六になって、挙句には毎日……：……へへん。さ、いこうか。

くすりは台車を押そうとする。

大丈夫だよ、これは誘拐でも窃盗でもないよ、置かせてもらっていたんだよ、どうした、君は行きたくないのかい？ 向中野さんとの生活を手放したくないのかい？ ダメだよ君は連れて帰る、何のためか？ 私と暮らすためだよ、暮らしてほしいんだよ、何を今更って思うかい……本当のことを言いますか、私はここを出て行く時、君を処分するつもりでおりました……。あれえ、驚かないねえ、君も相応の覚悟があったんだね……私是不退転の覚悟で区の家電リサイクルセンターに電話をかけたんだよ、きつと型の古い君は必要な部分だけ回収するためにバラバラに解体されていくのだろうと、その姿が鮮明に浮かんでね……その、その姿が、その姿形があの人と、飛行機に乗ったあの人と、あの飛行機に乗ってしまったあの人と、重ねたくないと思死の抵抗をするも容赦なくあの人と重

なり始め、すると途端に息がつまり、要件を尋ねる担当者の声に返事することなく電話を切った、切ってしまった……しょうがない、だったらまた君をリサイクルショップにとも考えたよ、でも、また店頭に並び、おそらく売れ残っていく君に、つつい会いに行ってしまう予感がして、だったらここに置いていき、誰かのものになるのなら私もやすやすと会いにはいかない、いってはいけないだろうとそう思い、大家さんに五万円を握らせ頼み込み、君を置かせてもらったんだよ。向中野さんが君を受け入れてくれて良かったよ。ん？くすりさん、あなたがずっとあの人と呼んでいるのは、ああ、その名前はまだ呼ばないで！ その名前を呼ぶ助走がまだ私には足りていないから。この部屋を去ってからあの人のことを思い出しても決して名前を独り言わずに、心の中でも打ち消し隠し通し、一瞬で極まる感情をどうにか、どうにか抑え込んでいたんだよ。だから、まだ、あの人で……ありがとう……。でも、そうか、君は何も知らないんだね。私はここを去る間に、あの人のことを君に告げたはずだよ、あの時の沈黙はなんだったんだい？ もう忘れてしまったのかい？ まあ、いいや、道道そのことは話そう。

くすりは急に取り乱して、

ああ、事故でなく、どこの山にもどこの海にも衝突せず墜落せず、未だ空を未だ飛び続けて、飛び続けていてほしいと、はかなくちっぽけな、あの人が生きていこうという希望を捨てられずにおります。だって、何も無い、この目ではつきりと確認できるものは何も無いんですから。想像の中であの人の体にふれたその感触の手応えのなさが、余計に虚しさを膨らまし、ああ、せめて、せめてなにか、体がなければ、あの人があの時着ていた服のひとつきれでもいい、この手で、この手のひらで、あの人をさわりたいんです、でも、それできない、できないでしょう、ああ、ああ、そんなこと！ 私は何を言ってるんだ！ まだ飛行機は飛んでいるかもしれないだろうにっ！ ……もう縫れるものが君しかないんだよ私にはっ。

くすりは台車を押してアパートを離れる。

くすりは洗濯機に乗せた台車を押しながら舞台上を右や左や道を進むように動いていく。

(♪ 歌う)

聞こえるの

消えないシミの

乾いて笑うあどけなさ

だけど

私はうれしいの

いつまでも

響いてくれよと

願うほど

② 前の場面から引き続き、くすりは洗濯機に乗せた台車を押して道を進んでいる。くすりは交差点にさしかかったのか、一度止まる。そして、動き出すが急にまた止まる。

おおっとおっ！

くすりは車に轢かれそうになったらしく、驚きと怒りが混ざり合ったような面持ちで、走り去った車を目で追っている。

あの野郎っ、ギリギリで黄色だよーんとも思ってたやがるんだろうっ。

くすりはあらためて横断歩道を渡る。

危なかったね。あのバカ車のせいでせっかくの楽しい道行きが終わっちゃうところだったじゃないかい。まだ池袋にも着いていない、私たちは雑司が谷まで行かなくっちゃならないんだから……へへん、君の運命は私が握っていることだね、私が君を台車もろとも道路に突き出せば、きつとももの見事に吹っ飛ばされ、あつという間に再起不能になってしまうね、乗っている側は圧倒的に無力さ、運転の仕方を知らなければ尚更、命を預けるしかない、しかもそれが多くの場合、運転しているのは見知らぬ他人なんだから。でも、普通に考えれば運転手とか船長とか機長とかが乗客をわざわざ危ない目に合わせようなんてしないよ、それはとっても簡単なことさ、簡単なことじゃないか、事故を起こそうとすれば乗っている自分にだって危険が及ぶし、不本意に事故を起こしてしまえば失職の憂き目に遭う可能性だって出てくる、というか、本能的に誰もが危険なことを避けるように生きてるんだよっバカヤロー！ バカヤロー！ バカヤロー！

くすりはグッと台車を押して進む。

ああっ、どこへいった、どこへいったんだろう、あの飛行機はどこへいったんだい、君は知ってるのかい、君は知らないのかい、そうだよねそうだよね、君は忠犬ハチ公のように帰らぬ主人を待ち続けていたんだね、君の主人がどうなったか話してやらなくっちゃね。

一年前、二〇一四年の二月の終わりから三月にかけて、私とあの人は漸く目標に達した旅行貯金でアジアの各地を訪れたんだ。カンボジア、タイ、マレーシアと、シンガポールもその流れで行くつもりだったんだけど、マレーシアのクアラルンプールに滞在中、あの人にお祖母さんが事故にあったと連絡がきたの、あの人は迷わず実家に帰る、でもあなたはシンガポールに行ってマライオンの写真を送ってくださいよと私に言い、北京行きの航空券の手配を始めたの。事情が事情なのにもかかわらず、私はあの人とシンガポールに行けないことにイラだって日本に帰るとふて腐れた。そうすると、あなたは行け、私は行



かないといつも通りの言い合いに発展して、すると、じゃああなたも僕と一緒に来ますかと楊くんは私に迫っ、あ、ああっ、ついに、ついに言ってしまった、言ってしまった……楊くん……楊くん……楊くん……久々に口にしたよ……楊くん……

少しの沈黙。

そう、それでね、楊くんの一緒に来るかとの問いに私は答えることができなかった。結局決めきれないまま、その日の深夜〇時四一分発マレーシア航空370便に乗って、楊くんは行ってしまった。私は楊くんと一言も喋らず、結局最後も目を合わせることはないまま、楊くんは北京には朝の七時くらいに到着すると私の背中に言い、行ってしまった、行ってしまったんだよ……私は空港に見送りに行かなかった……

そして、いいかい、ここからが肝心要のところだよ、楊くんが乗った飛行機は定刻通りクアラルンプールを出発したんだけど、その約五〇分後、ベトナム南部の海の上を飛行中に突然左に旋回して進路を南西に変えた、さらにそこから西へ旋回して、そして南へと旋回してインド洋に向かい、それから行方が分からなくなってしまったんだよ。外国の地理に明るくないあんたのためにざっくりな例えで言うかね、渋谷から池袋に向かったもの代々木で左へ旋回、高円寺まで行ってさらに左へ旋回して、横浜に向かい、そして、そのまま太平洋の海へ、どう？ わかった？ でもいいの、いいのよ場所なんて、とにかく楊くんが乗った飛行機は北京には到着せずにインド洋南部で消えてしまった……

私はそれをホテルで知った、テレビで、言葉は分からなかったけれど、映し出される飛行機や空港、記者会見する空港会社の職員、ニュースキャスターの深刻な様子で不穏な何かを感じて体がふるえた。時計を見ると朝の十時を過ぎていた、私はすぐに電話をした、繋がらなかった、繋がらなかった、何度も電話をしたのだけれど繋がらなかった。不安が一層、不安が一層と何層も何層も募り募り膨らんで、耐えきれなくなった私は風船が弾けるように立ち上がり、荷物を急いで整理しチェックアウトを済ませると、空港へ向かい、騒然とする空港の中を掻き分け押し分け進み、成田行きが一番早く乗れる便のチケットを取り、その搭乗を待つ二時間三十五分、ずっと楊くんに電話をかけた。でも、出発の頃には充電も切れ、私は成田へ向かう飛行機の中でただただ目をつむり、海を大地を見ないように目をつむり、成田へ到着するまでの七時間、眠ることもできずとずっと目をつむってつむり続けて、着陸した飛行機のあの振動で、私は目を開けた、開けてしまった。

成田からの電車の中でも目をつむりにつむり、駅からお家までも目をつむって歩いていたら電信柱に額を打ち、驚いて目をあけると目の前に猫が、猫が、まさかまさかの猫が寝転んでいた、意味が分からない、ここでこのタイミングで猫が寝転んでいるのを見つけた意味が分からず、駆け出し、帰り着いたと同時に充電器に繋いだ携帯電話からは何の着信もなく、私は、私は……

くすりは立ち止まってしまおう。

……楊くんっ、楊泰然ヤンタイランっ！ どこに、どこにいるの、どこにいるのよ……。

少しの沈黙。

……え、飛行機が消えたのはどうしてかって？ わからない、わからないだよ。マレーシア政府はなぜか情報を小出しにして、何も明らかにしない。だから、色々な憶測が流れたよ、テロリストによる空中爆破、過去に機体の損傷があった、カザフスタンへと針路を変えタリバン支配地域へと向かった、モルディブでの目撃情報もあがった、ゾンビブレイン説っていう全員が気絶して燃料の失くなるまで飛び続け……飛び続け……。結局、マレーシア政府は機体の残骸もブラックボックスも何も見つからないままインド洋南部で消えたよ、そう決めつけ、そう決めつけたままずっとなにも……ねえ、飛行機は今もなお飛び続けていると、希望をどうしても捨てられない私をおかしいと思うかい？

事故から半年の間、楊くんが別の便で北京で向かったと思うようにしていた。いつか帰ってくるだろうと、楊くんは物は一切手をつけずにそのままにしておいた。君にも楊くんのこととは話さなかったね。でも、待てど暮らせど、楊くんがドアを開けることはなかった。

そして、二週間後、中国から楊くんのご両親が部屋に訪れた。ドアを開けて楊くんのお母さんと数秒見つめ合い、楊泰然という手書きの紙とカッコつける楊くんの写真を差し出された途端に、私とお母さんは抱き合って涙を流した。言葉で通じ合えないご両親と私は沈黙のまま、ただただ楊くんの残していった物を一緒に眺めていた……楊くんの物はすべてご両親に持って帰ってもらうようジュエスチャーで説明したよ、もちろん君以外……。楊くんの物がなくなって、私はあの部屋を出て行くことを決めただよ……その日は私の誕生日だった……楊くんとうちようど一ヶ月違いの……。

くすりは台車を押ししてしばらく進んで行く。不意にくすりはつまずいたのか台車を止める。

どうしたんだいっ？ 先を急いでいるんだよ、向中野さんが早めの帰宅をして警察でも呼ばれたら面倒なことになるんだよ、え、ここですよ？ どういうことだい？ ここに僕はいたんですよ？

くすりは辺りを見回す。

……リサイクルショップ・ワンダーランド……そうか、ここだったんだ、あんたもこうして陳列されている後輩たちのように店の軒先で誰かを待ち構えていたんだね……僕には妻がおりました？ どうしたの急にそんな身の上話を？ あ、でも、へーそう、妻がねー、僕と共に売れ残りその寂しさがお互いを惹かれさせ……うん、そう、え、それって聞かないきゃダメ？ え、だってさ、洗濯機同士の愛の語らいなんて人間にはよくわからないと思うんだよ、あれでしょ、ガガガガ、ウーンウーン的なやつでしょ、そんなん聞かされてもね、ああ、ごめんごめん急に擬人化から外れてしまったね、うんうん、あーそう、店

主に隠れて結婚の契りをねえ、へーおめでとー、え？

　　どうやらリサイクルショップの店主が出てきて、くすりに話しかけたらしい。  
　　もちろん店主の姿は見えない。

（店主と話している）ああ、いやいや、売りにきたわけじゃないんですー、ええ、あの、引越しとか修理を頼まれてましてー、同業者っていうわけじゃなくてー、えっとただの趣味ですかねー、こんな格好してますけどー、ああ、そうですね、友達が壊れちゃったというのでー、はい、え、覚えている？ この洗濯機はこのお店のものだった？ えーそんな特徴的な洗濯機でもないのにー、同じ型のもだったんじゃないですかー、ああ、ここの傷がねー、へー、あ、あー、いつまでも売れ残った最高記録だったんですかー、へー、こいつ以上に売れ残ったものはなかった、そうですね、中国人の…流暢に日本語を話す青年が…これを買っていった…：…ああ、電源がね、きちんと入るのかどうか納得しなくて、コンセントを引っ張ってきて確認してもらったんですねー、それが強く印象に？ そりゃだってリサイクル商品ですからー、あ、あ、すみませんすみません、そんなねー、不良品を売るわけじゃないですよー、ああ、そうですね、中国では新品の物を買うにも箱から出して電源が入るかどうか確かめるらしいですよー、あ、じゃあ、先を急ぎますのでー、え、いや、私は日本人です…：…そんな、謝らないでください、別に間違えられたって…：…：…。はい、じゃあ、どうもー。

　　くすりは台車を押して進む。

……………

　　くすりは一度止まると、作業着を脱ぎ、年相応の服装になる（作業着の下に着ていた）。

　　もー暑い。それに都会を通過するからね、ちよいとお洒落をしなくちゃね。

　　くすりは台車を押して進む。

　　来たぜ、池袋。

　　池袋の駅前を通っていくようだ。

　　楊くんは服装には敏感だったね、幼い頃貧しくて、何枚かの服を着回しに着回してとても恥ずかしい思いをしていたんだって、だから、そう、お父様の事業が当たって急にお金が入るようになってからは真っ先に服をね、買うに買ったって言ってたね、アルバイト先で初めて楊くんに会った時、その私服がとってもお洒落でしかも日本語が堪能だったから、私は在日の人かと思ったんだけど違くてね、ああ、出会った時が一番いいんだよ、最初の

内に幸せは宿りまくってる……そのお店も池袋だったね、お洒落な居酒屋、新人の私に楊くんは優しく教えてくれたなあ、あの女好きめ……。

くすりは台車を押しながら恥ずかしそうに顔を俯ける。

くそう、チラチラ見やがって、そんなに珍しいですか台車で洗濯機を運ぶ三十路の女が、おおっと、交番がっ……こういう時は当然という顔つきで進むのがいいんだよ、あんたも妙な緊張をするんじゃないよ。

くすりは平然を装って進もうとするが、不意に駆け出す。人の間を縫うようにジグザグしながら急ぎに急ぐ。振り返り、警察が追ってきているような気がしているのか、さらに急ぐ。漸く人通りの多い道を抜けて、小道に入り、一息つく。息を切らせていたが、込み上げてくるものがあって、

あんたなんかさつさと処分しておくべきだったんだ、この未練はどうして残ってしまったていたんだい、あの北京行き飛行機に乗って私も中国へと向かうべきだったんだよ、中国へ行ってご両親に会うべきだったんだ、私がああ飛行機に乗ってれば無事に北京に到着していたかもしれないんだ、それは風が吹けば桶屋が儲かる原理と一緒さ、誰かの一挙手一投足が誰かの運命を変え決めていくんだ、思いとどまった理由はずっと自問自答してる、楊くんが中国人だからか、違う、それは違う、笑いのセンスはまったく合わなかったけど、衣食住の生活パターンも食べる物もセックスも相性が良かったんだ私と楊くんは。でも、喧嘩は絶え間なくしてた、それだってあいつが大学院の同級生に飽き足らず、年下の学部の子にも手を出し続けるから、喧嘩の原因はいつもそれさ、そりゃ高卒無学でさらには歳が九つも上な私と付き合ってたんだらうさ……でも、でも、でも、嬉しかったんだよ、クアラルンプールのホテルであなたも来ますかと言った、言ってくれたあの瞬間、私はとても嬉しかった、でも、直前の言い争いのせいで素直になれなくて……。

少しの沈黙。

なんだったんだらう、あの天邪鬼っぷりは一体なんだったんだらう、あれはプロポーズだったんだ、楊くんは私と結婚を考えていてくれたんだよ。じゃあ、どうして私がああ飛行機に乗らなかった、北京行きだから？ 北京行きだから？ ソウルだったら？ ジャカルタだったら？ バンコクだったら？ シンガポールだったら？ モンゴルだったら？ デリーだったら？ モスクワだったら？ ベルリン、ローマ、ワシントン、ロンドン、ストックホルム、リオデジャネイロ、ブエノスアイレス、カイロ……東京だったら？ 東京だった………あんなに私に優しくしてくれた人がいた？……あんなに笑った私が今までにいた？………ああー、ああー、私に乗ってれば飛行機は北京に到着していたんだ、ああ、ああ、ああ、今もなお飛び続けているなんてそんなこと、今もなお飛び続けているなんてそんな馬鹿げたこと……最後の瞬間に、楊くんっ、楊くんっ、あなたは私のことを……ああ！ 最後の瞬間なんて！ なにを言ってたんだ私はっ！

くすりはその場に座り込む。しばらく間があつて、

………タイに訪れた時、洗濯機をたくさん置いた洗濯屋さんがあつたんだよ。そのお店のお母さんと女の子がね、並んで道端に座り楽しそうに話をしているね、それが夕暮れと相まってとってもいい雰囲気だね………とってもいい雰囲気だったんだよ………それを私は楊くんと見ていた………。

くすりは不意に洗濯機を覗む。

誰がお前と暮らすもんか、お前は楊くんじゃないんだ、なんだったってついてきたりしたんだい？ 私はお前をここに置いていくよ、最初からそのつもりだったんだ。お前の存在が楊くんを思い出させるんだ、お前が存在する限り私はずっと地団駄を踏み続けなくっちゃならない、たかが洗濯機のために、ふふふ、お前もそう思っているんだね、何を洗濯機に向かつてそんなに深刻ぶっているんだと、お前は呆れているだろうさ、もう俺は君らの洗濯機じゃない、向中野さんとその彼女さんとの愉快的生活をどうして奪われなきゃいけないんだ、俺は今の生活の方が幸福だよ、上更家さん、あんたと暮らすならここで置いていかれ、廃棄された方がまだマシだよ、晴れることも雨の降ることもない曇り空のような生活が永遠に続くんだろう、生き地獄とはまさにあんたとの生活だよ、行けよ、俺を置いて行けよ、頼むから俺を置いていってくれよ！ ……この洗濯機っ！！！！

くすりは洗濯機を台車から落とそうとする。

処分されたいならここで破壊してやろうじゃないか、ここから突き倒して、手で足でそこから辺にある棒で、跡形もなく、いや、踏切にお前を置いていこう、それがいい、木っ端微塵になってあつという間にあの世だよ、楊くんと同じ運命さ、お前の欠片を拾った子供が洗濯機だと気付くだろうか、そんなわけないっ、お前の部分を見つけてお前とわかるのは誰もいないんだっ、楊くんと同じさ、バラバラになった楊くんの体を………どこのどいつが……楊くんの体がバラバラになったなんて言ってるんだよ！ ……どこのどいつが……楊くんの乗った飛行機が、海に沈んだって言ってるんだよ………。

沈黙。

………ごめんね、さあ、私の家にかどうか、いこうよ。え？ 僕は見つけれますよ？ そんな慰めはいいよ、やめてよ、本当です、僕には見つけることができます、楊さんの汗や匂いを僕はまだ覚えてますから、大丈夫、大丈夫ですから、僕は楊さんのこと覚えてますから……君を海に、インド洋の海に連れて行ったら、楊くんを見つけてくれるとでもいうのかい？ それとも君はあの飛行機の行方を知っているとでもいうのかい？ ええ、そうです、僕は楊さんのこと覚えてますから……ふふふ、君はいつの間に未来のハイテク機器に成り代わったんだよ………。

くすりは台車を押して進んでいく。  
暗転。

③ 明かりがつくと、そこはくすりの部屋で、くすりは洗濯機を設置している。

ふー、危なかったね、灯台下暗しっていうのをまさに経験したよ、この部屋が二階だというのをすっかり忘れていたね、どうやってひとりて君を持ち上げろっていうんだいまったく、たまたま配達途中の郵便屋さんが手伝ってくれたから事なきを得たけど、完璧な計画なんてないね。

くすりは洗濯機を設置し終える。

よし、これでっ。

くすりは工具を置いて、洗濯機の前に立つ。

……。

しばしの沈黙。

……洗いたい？ そうだよね、楊くんのをね、洗いたいよね。でも、ごめんね、楊くんの服はもうないんだよ、楊くんのご両親に差し上げたってさっき伝えたじゃないか、だって、だって……分かるでしょ……。とりあえず、私の服で我慢してよ、楊くんと君が好きだった洗剤と柔軟剤は用意してあるからさ。

くすりはクローゼットに行き、服を選び始める。

あいつはいちいち私の着るものに文句をつけてきやがったなあ、でも、あいつの言うことがいちいち当たってて、それも私をイラッとさせたなあ。

くすりはなかなか服を選ぶことができない。

……決められないよ、楊くん……。

くすりは少しの間、動きを止めるが、ある服を発見して、

あ。

くすりはその服、Tシャツを手取る。

(洗濯機に) 覚えてる？ これ、楊くんが、部屋着用に、勝手に着てた私のTシャツ……  
ずっとかけっぱなしにしてたんだ……もう捨てたと思ってたよ。

くすりはそのTシャツをハンガーから取る。

よしっ！ これを洗おうっ、洗ってもらおうじゃないかっ。君も楊くんの残り香がついた  
この服なら文句はないよね。でも、ちよつと待って。

くすりはTシャツに鼻をつけ、思い切り嗅ぐ。

……楊くんの匂い……残ってないね……。

くすりは洗濯機蓋を開けて、Tシャツを入れようとするが、

そうそう、このシミ、私がナポリタンを投げつけたシミだよ、このシミは残したままにし  
といてね。

くすりはTシャツを入れる。

この洗剤も久々だよ。

くすりは洗剤を投入する。そして、電源を入れ、スイッチを押す。電信音が流  
れ、水が流れ始める。

ああ、懐かしいっ。

くすりはしばらく洗濯機を眺めている。

(♪ 歌う ※ 同じ曲の中国語バージョン)

ウオハイナンテインダオ  
我還能聽到

シーブダイアオダワンズ  
洗不掉的頑漬

ブーティンダクアンシヤオ  
不停地狂笑

チーシー  
其実

ウオエエンイ  
我願意

タージーシューザイシヤオ  
它繼續在笑

シエンジー  
甚至

ウオエエンイ  
我願意

ターヨシユエンザイシヤオ  
它永遠在笑

「洗濯には軟水がいいんです」と軟水のペットボトルを四〇リットル分も買ってきて、もちろんお金の無駄だと私は反対し喧嘩になったけど、必死に抵抗し私の隙をつけてすべて入れ切った時のしてやったりの楊くん的笑みを思い出すよ、このふざけ方は中国人のものかと思っただけど、きつと違う、楊くん特有のふざけ方でユーモアだったんだろうね、「水が服を洗っているんじゃないんです、服が水を洗っているんです」と豪語し、「水は汚れていくことで自分自身を発見する、透明であるが故の苦しみです」としたり顔で続け、「水は服に触れ痛みを感じ、その痛みでもって自分の存在を感じとっているんです」と結んだ楊くん「どうして水はそんなに自分探しをしたがるのかしらん？」と私が戲けると「水はどこまでも広がっていくからですよ」となぜか私のおっぱいを触ってきた、触ってきやがったなあ……。

おもむろにくすりは服（上下の服と履いていれば靴下も）を脱ぐと、洗濯機に入れる。

楊くんの体と私の体の代わりだよ、そうして渦の中で絡み合って、私の虚しさを埋めておくれよ。

くすりは洗濯機を覗き込む。

君はさつき楊くんのことを見つけられるって言ってたね、ふふふ、ありがとう、嬉しかったよ。楊くんの髪の毛一本くらいなら君のどこかにまだ残っているかもしれないね、ふふ、そんなことはないか……でも……そうか、そうだよ！

くすりはクローゼットの服を調べ始める。

髪の毛一本くらい、私の服に、楊くんの髪の毛が残っているかもしれない、どこかに楊くんの毛の一本が落ちているかもしれない。

くすりは執拗に服を、さらに床も調べていく。



……ないっ……ないっ……ないっ……ないっ……ないっ……ないっ……  
……あ、ああっ！ あった！ あった！ こ、これは、楊くんの、楊くんの……これは、  
私の……。

それでも諦めずにくすりは服や床を調べる。

もしかしたら、あのTシャツに！

くすりは洗濯機の蓋を開けて、手を突っ込んでTシャツを出して、水を床にこぼしながら毛を探す。

ないっ、ないよっ！

くすりはTシャツを洗濯槽に戻す。その時、

――！

くすりは洗濯槽を覗き込んでいる。

……私が映ってる、洗濯機の水に、私が映ってる……楊くんが着たTシャツの上に、私が映ってる……。

くすりはTシャツに手を伸ばす、ずぶ濡れのTシャツを取り出すと、それを着る。そして、また洗濯槽を覗き込み、Tシャツ姿の自分を見る。

……楊くんっ！ 楊くんっ！ 私が、私が、分かる？ 私が見えるの？ 私が見えるのね  
……楊くん……会いたかったよ……やっど、やっど会えたね。

くすりは洗濯槽に映る自分に楊を重ね、楊と再会したかのように打ちふるえている。

楊くん、今どこにいるの？ 教えて、すぐに迎えに行くから。ずっと待っていたんだから。ふふふ、笑ってるね、私も笑ってるでしょう、こんな風に笑うのは久しぶりだよ……うん、うん、今にも涙が出そうよ、よかった、生きていたん……え、なに………寒い？ 寒いね、うん、そうだよ、寒いよね、私も寒いよ、あなたの体温を感じているもの……。

くすりは洗濯槽を覗き込んだまま、自分を抱きしめる。

どう、これで？ ……でも、まだ寒いよね……ごめんね、ごめんね……。

くすりは体を暖めるように両手で体をさする。

あー！ 行かないで！ 楊くん！ 楊くん！ 楊くん！ 体が熱くなってきたよ！ あなたの体も暖まってきたでしょ！ 楊くん！ 楊くん！ 行かないで！ そう、そうだよ、そんな風に私を抱きしめてくれていたらいんだよ！ 寒くなんかいいよ、私たちは抱き合ってるんだよ、寒いわけじゃないじゃないか。

くすりは体をさすり続ける。

……ふるえてる、楊くんがふるえてる……。

くすりは諦めずに体をさすり続ける。だが、不意に手を止める。

……そうだ、水を、水を抜けばいいんだよ。そうだろう？ 水を抜けばいいんだろう？

くすりは洗濯機の脱水のスイッチを押して、また洗濯槽を覗き込む。

……あ。

脱水が始まり、水が抜かれていく。

……ああっ！ 水が！ 水が……こんな……滑稽なことって……あるの……。

くすりはどうしようもなく、洗濯槽を見つめている。

………

くすりは洗濯槽から顔を上げる。

………どうした………どうした私！ もう一度水を入れ直せばいいじゃないかっ、どうしてやらないっ、どうしてやらないんだよっ、やり直せっ私っ！ お前も楊くんといいたいなら水を入れるんだよっ！ 早く！ 早く！

しかし、くすりはスイッチを押さない。やがて、ゆっくりと洗濯機から数歩後ずさっていく。

………楊くんは、海にいる………だっって濡れたTシャツはっ！ どうしてTシャツが濡れてんだっ！ 海に、海に、墜ちたからだろうが！ 私はたった今、見たんだ、濡れた、ズブ濡れた楊くんを……バラバラじゃない、千切れていない、顔も手も

足もある楊くんには、私は今、抱きしめられていたんだから！

長い間。くすりの呼吸と洗濯機の脱水の音が聞こえている。

……寒いよ、寒いよ……。

(弱々しく歌う)

ウオハインテンダオ  
我還能聽到

シーブデアオダワンズー  
洗不掉的頑漬

ブーティンダクアンシヤオ  
不停地狂笑

チーシー  
其实

ウオユエンイー  
我願意

ダージーシューサイシヤオ  
它繼續在笑

シエンジー  
甚至

ウオユエンイー  
我願意

ターヨシユエンサイシヤオ  
它永遠在笑

不意にくすりは洗濯機に目を向ける。

………え……君のせいじゃないよ、君はそれでいいんだ、いいんだよ……ふふふ、Tシヤツを脱げばいいじゃないですか？ そうだね……でも、私はもう少し、もう少し楊くとふるえていたんだよ………あ……、そうだね、そうだったね、君の脱水の振動でふるえる私の背中に、楊くんは欲情していたんだったね。

くすりは洗濯機のところへ行き、両手で洗濯機の脇を抑え、優しく体重をのせる。脱水の振動なのか、寒いからなのか、くすりの背中がわずかにふるえている。

……楊くん、ふるえてるよ、私の背中が。脱水の振動で私の背中がふるえてる。寒いからじゃないよ、そんな不幸なことじゃない、あなたが欲情した背中だよ、ほら、いつものように抱きしめておくれよ。抱きしめないのかい、あなたはどこに行ってしまったんだい、

ふるえてるんだ、私はふるえてる、楊くん、あなたの体はもうふるえることなんてないんだろ？ね……いや、そんなことない、そんなことないよ……もう一度、私に体を重ねて、ふるえを感じとって……ほら……ほら……ほら……このふるえは……飛行機が……地上にふれた……振動だよ……あなたが乗った飛行機が成田に到着したんだよ……今……私があなたにふるえを伝えているよ……これは恐怖ではなくて……そう、安堵のふるえだよ……。

くすりはまだ洗濯機に手をついたまま。  
暗転。

おわり